専修学校の留学生支援

-専修学校日本菓子専門学校における留学生-

専修学校日本菓子専門学校副校長　秋田 勝
AKITA Masaru

今回の特集テーマは「専修学校の留学生支援」であるが、本校のように、製菓、製パンの技術、知識を教育する小規模の専門学校において、物質的、金銭的な支援は無理な事である。「支援」を「サポート」と解釈出来るのであれば、在校生の時だけでない卒業後まで含めた本校の留学生への対応を記すことが出来る。

学生総数の18%が留学生と比較的少ない学校であり、大規模校で留学生も多くいる学校と同様の「支援」「ケア」は出来ない。

日本人学生であれ留学生であれ、本校に入学する学生は、将来菓子、製パン業界で一流の技術者、あるいは自店舗経営を夢見て入学する、すなわち自分の夢実現のための第一歩が本校に入学することであり、卒業後の本校とのかかわり、本校のサポートは、とても大切なこととなる。また、学校の教育方針、学生に対する考え方も重要な事であり、本校の場合創立の経緯まで記さなければ、入学前のこと、現在行っている留学生も含めた在校生教育、卒業後のサポートの説明は難しい。

以上のことから、本校の創立の経緯、目的、それに基づく教育、卒業後のことを順を追って記載する。

本校は、1960年（昭和35年）に開校されたが、学校設立の委員会はその数年前に設置され、その委員会は、日本の菓子業界の団体、大手菓子メーカー経営者によって組織された。菓子業界が設立した学校であり、多くの専門学校のように個人の学校設立者は存在しない。創立50年が過ぎた現在も、その開校時の教育理念、目的は変わっていない。

昭和30年代まで、製菓技術は徒弟制度のもと親方が弟子に年月をかけて教えて行くものであり、技術の伝承形態としては良い面もあったが、理論立て、衛生観念を持ち、創造性を豊かならしめる面では、マイナスの要素が多いことが日本経済の発展と消費の拡大の中で出てきていた。学校設立の目的は、この様なマイナスの面を是正し、技術も、知識も一流、また創造性も豊かな製菓技術者を養成することであった。しっかりとした教育のもと、目的に見合う製菓技術者を製菓業界に輩出しなければ、日本の製菓業界が衰退するとの意識もあった。現在本校で教えている和菓子、洋菓子パンのプロである教師にとってこの創立時の理念と目的はとても大切なことであり、自由な発想で菓子、パン技術、知識を教育として実践できることは、留学生に対しても現実的な対応が出来ることでもある。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

本校にアジアの国から学生が入学してくるようになった時期は、アジアの国々の経済が向上し食生活が豊かになり始めた時期と重なる。自国の食生活が豊かになって初めて、嗜好品である製菓、製パンの技術向上を目指し、留学をする余裕が出てくる。1966年（昭和41年）本校に初めて台湾より留学生が１名入学した。年数を追う毎に留学生数も少しずつ増えてきた。

昨年までの集計によると、本校は韓国からの留学生数が最も多く173名で、つぎに台湾からの35名であり、他のアジアの国々からは多くても10名程度である。近年中国からの入学者が増加しつつあるのも他校と同様である。卒業生総数が創立50年強の学校であっても約8,000名しかおらず、留学生の卒業生総数が200名程度の学校であり、留学生が多い学校とは言えない。この理由は幾つかあるが、まず製菓、製パン業を志す若者は、他分野、他業種に比べて実態はそれほど多くなく、また、入学を希望しても本校で学ぶのが難しいと判断され、入学不許可になり留学できない学生も多い。

昔から、アジアの国で本校は入学のハードルが高い学校との評価がなされ、入学してくる留学生は日本語会話能力、入学意識も含めかなりレベルが高い。

結果として在学時の出席率が良く、中途退学留学生もほとんどいない。また、卒業後母国で活躍している卒業生も多い。

以下、順を追って留学生対応を記載する。

１．入学前、入学希望留学生への対応

（１）オープンキャンパスに参加する留学生に対し、その時点で日本語会話能力を確認する。参加する時期によるが、翌年春入学までの期間と会話能力の向上との兼ね合いも確認する。また、参加無断キャンセルの留学生は、後日参加した場合、なぜ無断キャンセルしたかを確認する。

（２）学校見学希望留学生に対応する職員は、同様に会話の中で日本語会話能力を確認する。

（３）留学生の場合、中には既に母国で製菓、製パンの実業に就いていた者もおり、その技術的レベルも確認しておく。

（４）授業内容を詳しく説明する。入学、卒業までの教育内容をしっかり把握してもらう。アバウトな学校知識での入学は困るとの見解による。

２．入学を希望し、入学試験を留学生が受ける時

（１）ペーパー試験の出来具合も大切であるが、主に日本語会話能力を確認する。日本人入学希望者も同様であるが２名の教師と20分～30分の面接試験を受けてもらう。この時、面接教師判断で会話能力が低く授業に付いて来られない、他の日本人学生の迷惑になるとの判断が出れば、入学不許可となる。

本校に入学したければ、授業を十分に理解出来なくては困るし、学費のためにも、もう１年日本語の勉強をして、再度入学試験に挑戦することをすすめる。あまりにもペーパーテストの結果が悪い場合も同様の対処をする。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

（２）本校は、留学生だけのクラス編成は行っていない。日本人学生にも留学生とコミュニケーションを授業を通じて持ってもらいたいとの考えによる。実習の場合、製菓技術学科は３名１班、製パン技術学科は４名１班であり、留学生だけに求めることではないがチームワークとコミュニケーションがとれるタイプかどうかも見る。

（３）校則（特に遅刻、早退、欠席による退学規定）の説明をする。年間前期後期総授業時間数 1,340 時間で欠席が 200 時間を超えた場合、また前期、後期とも 100 時間を超えた場合は、退学処分になることを説明する。

無論、不可抗力的な事での欠席時間増加は考慮の余地を残すが、アルバイトの疲労等による欠席時間超過は許されないことを説明する。

ここまでが、入学前の本校の留学生対応である。国外の私学で学ぶことは高い留学費用を払うことになるのだから、日本の学校に入学するのにしっかりとした準備、確認、適応性を持って入学することを望んでいる。入学前の留学生へのケアの一つである。

３．入学後

（１）新入学生全員と留学生のみのガイダンスを入学後直ぐに行う。卒業後の日本国内での就職の難しさを説明する。本校は、入国管理局から優良校の指定を受けていて、留学生国内就職希望学生に対して製菓製パン企業から 30%の学生が内定をもらえるが、10%程度の学生しか就労ビザ取得が出来ないことを説明。

また本校で優秀な成績を修め、出席率も高く、「専門士」の称号を取得して卒業したとしても、必ず日本で就労ビザを得て働くことが出来る保証はないことを説明する。

（２）留学生会の説明。年間、懇親会も含め５回か６回の会合を開く。クラス担任と留学生会担当職員を紹介し、日常的なことでもかまわないのでいつでも面談は可能であることを伝える。

（３）現在、韓国、台湾に校友会支部（同窓会支部）があり、本校も協力し活動をしていること、また学生が望めば、校友会支部に学校から卒業後の母国就職のサポートを要請することも出来ることを説明。

（４）日本人学生とのより良いコミュニケーション維持の依頼。日本人の友人を沢山作ること等。

（５）2011 年の留学生年間出席率平均は 96.5%（2010 年度 97.6%）であり、真面目な留学生が多い。新留学生にも学校を休まないことを要請。

４．留学生の良い面

（１）日本人学生にとって、外国人と交流することが出来、友人になることも多い。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

同じ目的を持った学生同士であり、在校時、卒業後もお付き合いをしている。

（２）台湾、韓国の学生は、目上の人、教師に対しての態度が良い。韓国は儒教の影響か、日本人学生に良い模範となる。

（３）異国に来て、生計を立てながら学校に行く生活の大変なことは、日本人学生には良い刺激となる。

５．留学生の難しい面

（１）学校行事（学園祭準備等）に参加しない留学生も時としている。これは、技術修得のための勉強意識が過度に強い留学生に多い。面接で人との良いコミュニケーションを持つことも大切な外国での暮らしと説明。

（２）実技経験のある留学生は、詳しく説明を聞かずに独断専行をし、日本人学生に迷惑を与えることもある。

（３）国家試験である製菓衛生師試験を２年次に受験するが、そのための学科の校内ペーパー試験がどうしても難しく、再試験にまわる留学生も多い。本試験合格率は留学生受験者の 50%である。

（４）日本と留学生母国との間に政治的問題が発生した時のケアは大切なことであり、入学の時のガイダンスでも日本人学生・留学生ともに会話に注意することを話す。

６．卒業後

日本国内就職、帰国ともに製菓、製パン業に従事している限り、常に本校は技術等、サポートはするし、相談も自由であるとの認識の基、卒業する。

学校、同期生との交流を絶やさないようにすることを考えてもらう。

現実に日本の洋菓子、パンの技術は世界でもトップクラスであり、留学生は母国に帰国後も技術の向上のためにも母校である本校にアドバイス、相談を求めてくることも多い。また、同期生との交流を絶やさないことも考えてもらう。

日本人同期生で友人であれば、国は違っても同業者としていろいろ情報交換も出来るし、お互いがフランクに相談が出来る相手となることも知ってもらう。

７．結論

最初に記したとおり、本校のような中小企業的小規模専門学校は、「留学生の支援」を具体的に列挙して記載することは無理である。今までの文章にしても単なる留学生の学校内における説明と捉えられても当然である。本校の考える留学生への支援＝サポートを箇条書きで以下に記すことで結論としたい。

（１）日本人学生も留学生も全ての面で対等とし、学校対応も当然公平とする。

（２）日本で厳しい暮らしの中で通学する留学生とて、学則は厳しく適応する。

（３）狭き門の就職であっても、学校進路指導の先生は最大限の努力、サポートをする。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

（４）教師は、日本人学生と異なる厳しい条件で入学していることを忘れずに、面接等でケアする心を持つこと。

（５）留学生は外国人であるが故に、日本人学生と異なる理解も必要であるが、最も大切なことは一人の人間として見ることである。最もやってはいけないことは留学生の国に対しての偏見ないし私見を教師が持ち、その視点で留学生を見ることであろう。

この考え方は、洋菓子技術者である私自身の経験による。1969年洋菓子技術者は無論のこと日本人がさほど海外に行かない時期にスイスの製菓学校に留学した。その学校の先生の推薦でとても良い菓子店を紹介され働いたとき、日常生活を通した多くのスイス人の優しさとサポートにより、技術の勉強のみならず全ての面で満足のいく滞在ができた。これは、遠いアジアから来た若者を一人の人間として尊重してくれた結果による。本校の留学生もかつての私と同様であり、国の誇り、留学の目的を忘れずに勉学に励み、モラルを持って生活することを希望し、そのような留学生は必ず学校を含めた多くの日本人が何らかのサポートをしてくれると、留学生には常々話している。

以上が本校の留学生対応であり、精神的なことも含めケアしていくのが本当の「留学生支援」ではないかと思う。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.